

学院史編纂室共同研究報告

二〇〇二年度から始まった共同研究は、二年間を一区切りとして活動しているが、第五期の二年目に当たる二〇〇一年度は次のテーマ、研究組織で行った。

研究テーマ	研 究 員
院長研究 —ランバス、 ニュートン、 ベーツ—	○神田 健次（神学部教授） 池田 裕子（学院史編纂室） Daniel Harald Dellming （高等部教諭） 舟木 讓（経済学部准教授） 山内 一郎（名誉教授） 山本 栄一（名誉教授） ○福井 幸男（商学部教授） 井戸田史子（元大学図書館職員） 打樋 啓史（社会学部准教授） 神田 健次（神学部教授） 田淵 結（教育学部教授） 辻 学（広島大学大学院教授） 中道 基夫（神学部准教授） 山 泰幸（人間福祉学部准教授） （○印・主任研究員）

一 院長研究—ランバス、ニュートン、ベーツ—

これまで、ランバス、ニュートン、ベーツを中心として研究してきている。

神田主任研究員は、これまでの研究課題であった「草創期のエキキュメニカル運動とW・R・ランバス」を論文として本誌に掲載した。また、昨年の六月九日に同窓会東京支部会において、「関学創立者W・R・ランバスの日本における働き」と題して講演を行い、七月一四日には宗教活動委員会第一回教育研究部サロンにおいて、「関西学院創立者 W・R・ランバスの生き方に学ぶ」と題して講演を行った。さらに、『母校通信』の二二八号に「上海とウォルター・R・ランバス」、二二九号には「千刈キャンプのアウトターブリッジ・ホール」と題する小文を寄稿する機会が与えられた。

また、山内研究員共々キリスト教学校教育同盟の1000年史編纂委員として関わってきたが、この三月に長年にわたる研究成果として、『キリスト教学校教育同盟1000年史』の『資料編』及び『正史編』を刊行する運びとなった。その編纂作業の中で、これまで課題となっていたキリスト教学校教育同盟と関西学院との関係について、とりわけ戦

前におけるベーツ院長と学校教育同盟の関係について検証する機会が与えられた。

山内研究員は、一月二五日に行われた月例会「ランバス・ファミリーの日本における使命」で発表された原稿を本誌でまとめたほか、今年の一には同窓会西宮支部総会において、「創立者ランバス先生の足跡」と題して講演した。

池田研究員は、昨年に引き続き「院長研究」の成果を短くまとめ、広報誌『K. G. TODAY』(偶数月発行)に発表した。今年度の記事は「父と娘」「忘れられた墓標」「天皇機関説事件と中島重教授」「クリスマスキャロル」「首相の紹介状」の五本である。インターネット上ではこれらの英語版も公開している。読者から寄せられる冊子化の要望に応え、新しい記事を発表する都度パソコン印刷により配布してきたが、記事が増えたため、「天皇機関説事件……」までの十五本を一冊にまとめた。

関西学院の歴史にまつわる話を短く紹介して欲しいとの卒業生からの声に対しては、「院長研究」の成果をさらに二種類の小冊子(『関学タイムトンネル』(日本語)、*Thus Spoke Bates* (英語))にまとめ、配布した(インターネットでも公開した)。

年二回発行の『学院史編纂室便り』には、「学長のラト

ビア大使館、クロアチア大使館訪問に同行して」(三三三号)、「日本・ラトビア国交樹立90年、国交回復20年記念植樹裏話―門外不出(?)のラトビア・オークの輸入―」(三四号)、「お宝拝見! ③今も忘れぬ「霜おく髪」の教え―Purity, Confidence, Love―」(三四号)を発表した。ラトビア関係の原稿は、当『紀要』第十七号に掲載された「ヤーニス・オアゾアリンシユ―日本(神戸、一九二〇―二一年)でラトヴィアの外交官と領事を務めた人物」(関西学院のラトヴィア人教師イアン・オズリンとその学生―曾根保と由木康)の後日談ともいうべきものである。これらの紀要原稿がきっかけとなり、一〇月にペーテリス・ヴァイヴァルス特命全権大使を西宮上ヶ原と神戸三田の両キャンパスにお迎えし、記念植樹苗木贈呈式、講演会、写真展等が開催されるに至ったことは望外の喜びであった。その際、大使からラトビア共和国外務大臣の感謝状が贈呈された。

三月には、神戸大学で開催された国際会議終了後、井上琢智学長のご招待でゲストハウス(ベーツ館)に滞在されたC・J・L・ベーツ院長ご令孫アルマン・デメストラル氏と、ベーツ院長に関する情報交換の機会を持った。

主任研究員 神田 健次

二 関西学院の戦前・戦中・戦後

二〇〇二年から開始された学院史編纂室共同研究プロジェクト「関西学院の戦前・戦中・戦後」については、その第五期の研究が昨年度から新たに始められた。しかし、今年度も残念ながら、各研究員多忙のために、具体的な成果として書くことはできなかった。昨年までの主任研究員の井上琢智氏が学長に選任され、急遽私が任じられたことは弁解になるまい。来年度以降は、研究課題を研究員間で相談し、特定のテーマに絞って、研究の推進を図ることが必要であろう。課題の発見は、多忙な研究員からは現時点では出来ないと考えるからである。

この共同研究の直接の成果ではないが、学院史編纂室が関わった研究として、辻研究員を中心とする「蛭沼寿雄著作選集」の全三巻が今年度七月、八月、九月に新出版社から刊行された。その内容は、第一巻『新約本文学演習マルコ・マタイ』（解題 辻学）、第二巻『新約本文学演習ルカ、ギリシャ語新約語法』（解題 嶺重淑、山本伸也）、第三巻『新約本文学史』（解題 前川裕）である。これらについては、『本のひろば』（キリスト教文書センター刊）に以下の書評が掲載された。第一巻については

土戸 清氏（日本新約学会前会長、国際新約聖書学会会員）による「三つの喜びを読者に与える、わが国に類書のない驚くべき著作」（二〇一一年二月号）、第二巻については津村春英氏（大阪キリスト教短期大学教授、学長）による「ギリシャ語中級テキストとしても最適」（二〇一二年一月号）、第三巻については浅野淳博氏（関西学院大学神学部教授）による「テキスト確立への学問と人間のドラマ」（二〇一二年二月号）が掲載された。

主任研究員 福井 幸男